



## 世界最大の望遠鏡『すばる』

安藤裕康 著

平凡社, 全 226 ページ, 1,400 円 (税別)

解説書

お薦め度  
☆☆☆★★

1960年に岡山 188 cm 鏡が誕生して、もはや 40 年近くが経とうとしている。ということは、「すばる」望遠鏡建設を進めてきた天文学者の中に、岡山の 188 cm の建設に直接関わった人が含まれているはずはないのだが、この本では所々で「すばる」の建設と岡山の建設とを対比させており、あたかも著者は岡山の建設にも携わっていたかのように思える。これは著者が、望遠鏡というものを天文学の要請のみならず、その時代の社会や技術的背景の中で捉えていることの現われだと思う。別に「岡山建設の時の経験を生かして」などとと言っているのではない（そもそも技術面で 40 年前のことが参考になるとは思えない）。大望遠鏡建設は、その時代における技術力・経済力に即した「国家プロジェクト」である、ということではないか？ そう思うと、今日のマイナス成長時代ではなく、バブル崩壊前に「すばる」望遠鏡が完成したってよかったのではあるまいか？

脱線したのでこの本の紹介に戻る。題名の示すとおり、「すばる」望遠鏡計画の動機、計画立案の経緯、技術的課題とその克服の経緯などが克明に描かれている。残念ながらファーストライト直前にこの本は出版されているので、ファーストライトでその素晴らしい性能が実証されたことは述べられていない。また、技術面の記述や目的とする天文学分野の説明などは、かなり専門的であり、一般社会人向けではないように思われる。また出版を急がれたのか、誤字や脱字も所々見られるのは残念である。

そのような些細な不満は別にして、白眉なのはドーム設計や鏡の研磨・蒸着法、構造や鏡面の能動制御など、望遠鏡に施したさまざまな工夫の数々の記述である。これらは現場で携わってきた者にしか

わからないことだと思う。

また第 5 章ではハワイに日本の観測所を設ける際の苦労話が展開されており、プロジェクトを推進する立場にある人には大変面白いはずである。またこの章の最後で、著者は「8 m 望遠鏡時代は長くて 15 年と見ておいたほうがよい。・・・次期の望遠鏡計画の構想を練っておかねばならない。ただし、それが地上望遠鏡となるかは自明ではない。」と述べている。全く同感である。次の望遠鏡が 2040 年に建設されるようなことになっては、いずれ日本の天文学は世界の第一線からはずれていくであろう。

いずれ「ハッブル望遠鏡の見た宇宙」と同様、ファーストライト以降「すばる」望遠鏡でどんどん得られていく美しい画像やスペクトルが本となって出版されるだろう。そういった本の方がこの本よりきっと売れるだろう(?)が、この本は、天文学を志している若手学生(学部 4 年か修士課程の院生)にはぜひとも買って読んでいただきたい。この本に対する私の評価は三ツ星だが、これは社会全般の読者を対象にした場合の話で、天文学を志している若手に限るなら五ツ星である。著者は後書きで、「七四吋望遠鏡談義」(萩原雄祐, 1961)を引用している。おそらく著者はこう言いたいのに違いない: 「そのうち、8 m 程度では研究対象が尽きる時がくるであろうが、当分はこれよっての研究題目は夥しくある。・・・この器械を高度に活用して、日本独自の天文学の礎をつくられ、世界に誇る研究成果の続出することを希望してやまない。」そう、「日本独自の天文学!」。「すばる」の完成により、大変な課題が我々に与えられたものである。

松原 英雄 (宇宙科学研究所)